Copyright（c）2010-2020 Zenninji Association All Right Reserved

ぜんにんじじほう
善仁寺寺報
THE ZENNINJI NEWS

2015年8月10日発行
Vol.22

発行者　青山 満　発行所　東京都文京区小石川4丁目13番19号
TEL　03(3811)4803　FAX　03(3811)3295
E-mail　kbkpm386@ybb.ne.jp

通夜

亡き方のご生涯を憶念（おくねん）し、有縁（うえん）の人々が集い、夜を通してご遺体を葬儀まで共に見守る。その旨を忘れずに、お通夜を迎えます。

通夜式という儀式はその一部であります。ともすれば儀式を滞りなく済ますことばかりに、心が向いてしまいがちな現在のお通夜ですが、改めてその意義を問い直されなくてはならないでしょう。

通夜は一時期は故人ともっとも近かったもの、たとえば、夫・妻・長子・親どのどちらか、といったものが、死んだ人の立場に応じて、同じ布団の中で一晩を過ごした、といいます。その後、通夜の儀式の後はお線香の火を夜を通して絶やさないため交代で誰かしら寝ずの番をする、などの光景がお通夜の夜はみられました。

現在、特に都心部のお通夜はこのような風習がだんだんと少なくなってきたようです。

通夜の喪主は誰が担うかということについて、主に戦前の家族制度においては、親の通夜葬儀の喪主は、その家の長男が責任をもって執り行っていました。

現在は、故人が男性の場合は、その妻、女性の場合は、その夫、子供が複数人いるときは、必ずしも長子とは限りません。独身の方の場合や、ご家族がいない場合は、有縁の方々で「～遺族会」「～いとこ会」などとしたり、ご縁の近かった親族・知人が代表して喪主を務めます。

さて、通夜の意義を考えるとき宗祖である親鸞聖人（しんらんしょうにん）（1173～1263年）はご自身の葬送をどのようにお考えになっておられたのかを知る必要があるでしょう。

本願寺第三世の覚如上人（かくにょしょうにん）が著した「改邪鈔（がいじゃしょう）」には

田中訥言「菊」

仏陀 Buddha
生涯と教え　第十七回

ビンビサーラ王との対話
～その二

出家して修行の身となったシッダールタにとって最大の強国マガダ国のもちかけた話は思いもよらない話でありました。

ビンビサーラ王はこのとき、シッダールタ沙門（しゃもん）と同い年とも五歳年下とも伝わっています。いずれにせよ、強国を率いる若き王です。野望もあり、良き人材の発掘も心掛けていたかもしれません。コーサラ国というライバルの大国も北西に控えています。

一説には、コーサラよりさらに北側にあるサーキャ国（釈迦国）の王子への軍事提携ともとれます。小国といえど、コーサラ国を背後から脅かし、マガダ国と挟み撃ちにする。実際には、そんな申し出であったかもしれません。

しかし、後のブッダとなる沙門シッダールタは決然と答えます。

「王よ、私は家を捨て、出家しました。快楽を捨てました。快楽は風のように不安定で、人を誤らせます。満たされない欲望は人を苦しめるのです。わたしの求めている道は苦の解決です。」

この答えはそのまま、ビンビサーラ王からの仕官の話を断る意味をもっています。

ビンビサーラ王は、しかし、シッダールタ沙門の言葉に胸をうたれました。

「若き沙門よ、よく分かった。しかし、ひとつ約束をしておくれ。そなたが道を得、快楽より解放されたならばそのときは、ふたたびこの王舎城に参り、わたしのために法を説いてくれないか」

まだ覚りを得ていない沙門は沈黙しさらに道を求めて去っていきました。

さて、このビンビサーラ王との対話の仏伝は何を物語ろうとしているのでしょうか。

ひとつには王子という身分を捨てても、常に誘惑され現実的な世俗（せぞく）の道に戻されてしまうのは、あっという間である、ということでしょう。

実際にはこれだけではなく様々にシッダールタを還俗（げんぞく）させようとする誘惑はあったのでしょう。

そして、戦争や政治で人間の欲求が真に満足されることはないということも暗示されているのではないでしょうか。

（つづく）

↑ガンジス河に身を浸して祈りをする女性たち（インド）

編集後記

気がつけば、善仁寺寺報創刊から早五年。多くの方のお通夜をお勤めさせていただきながら、一度も「通夜」について取り上げたことがありませんでした。

細かいことをいろいろ書くと葬儀も含めてまだまだ書き足りないと思われますが、また改めます。

印象深いお通夜もありました。お斎（とき）の席で故人との思い出をご遺族の方々で語り合ったり、発表しあったりと、お話をうかがっていると生き生きと自分は見てもいないのに、故人が若い当時の光景が思い浮かべられてきます。

合掌
（しょうまん）

本師聖人の仰せに云わく、「某親鸞閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたうべし」と云々　これすなわち、この肉身をかろんじて仏法の信心を本とすべきよしをあらわしましますゆえなり。これをもっておもうに、いよいよ喪葬を一大事とすべきにあらず。もっとも停止すべし。（真宗聖典 690項）

とあります。自分の遺体を京都の賀茂川の魚に餌として与えてしまえ、とまで仰っておられます。しかし、そのお心は信心を本義とせよ、ということでしょう。

現在、善仁寺では、ご命終のご連絡をいただいて、通夜までの間に、喪主の方にはご来寺いただいております。お通夜ご葬儀を執行するにあたり、様々にお打合せをさせていただいております。その中で、儀式の飾りつけ（荘厳）についてお話いたしております。それは、左記の親鸞聖人のお言葉に鑑みて、故人とのお別れの儀式という意味だけが近年はお通夜の意味となってしまっている現状を改めて問い直していきたいということからです。一般的な葬儀壇を使用した場合、下図のように飾り付けをお願いしております。大きな点はご本尊を置くということです。そして、三具足（香炉・紙花・蝋燭）を大谷派のもので揃えるということです。

故人のお写真やご法名は一段下げて置いて下さい。

真宗のご法要としてご本尊に手を合わせ、念仏申す。有縁の方の死を通して浄土が開かれる純粋なる生活を自分自身の生き方に問い返す。

このような願いのもとに私たち真宗大谷派の荘厳をご案内いたしております。

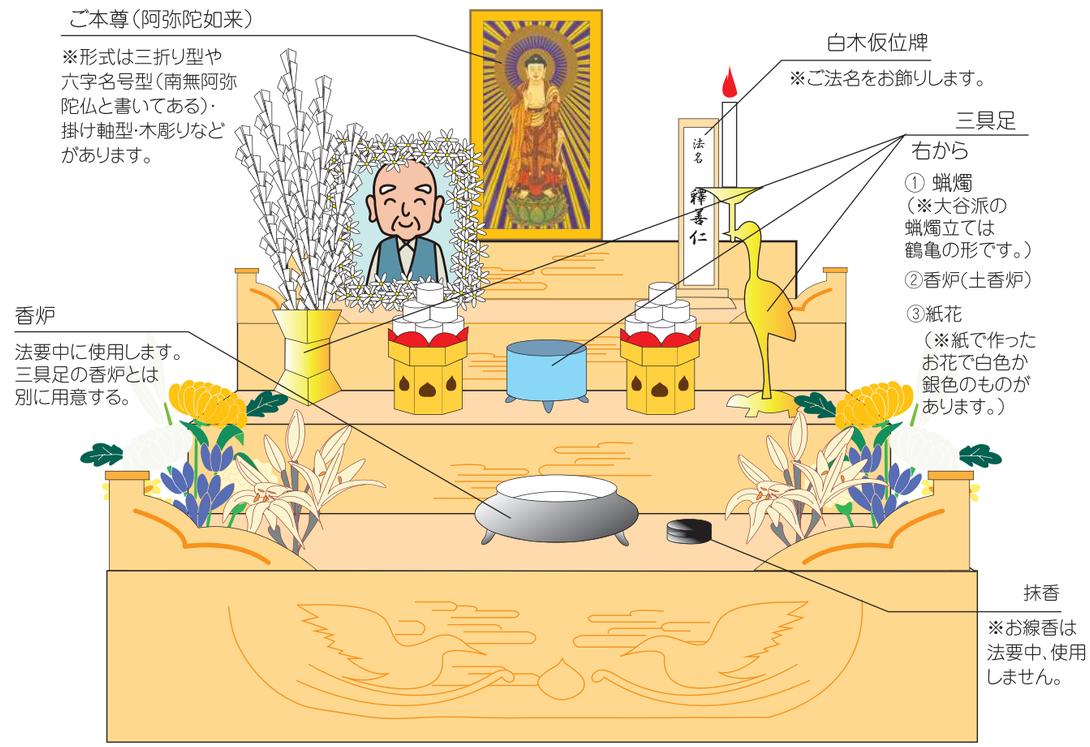
さて、会場ですが、以前はご自宅に祭壇を作ってお通夜を執行していたケースが大半であったようですが、次第に団地や町会の集会所 現在では ほとんどがセレモニーホールの式場を使用されるようになっています。

善仁寺では通夜葬儀をお寺で執り行うことができます。式後のお斎（お食事）の会場としてもお座敷をご利用いただけます。（但し、お寺を会場とする場合は設営などの問題から左の葬儀会社にてお願いしております。）

東京都北区堀船一―十五―十
東京葬儀社
（ファイナルプロデュース株式会社）
電話 0120-00-5943
（24時間受付）
ホームページ
http://www.final-produce.co.jp
※善仁寺を会場としない場合でも、葬儀社がお決まりでない場合はこちらの葬儀社をご案内しております。

通夜のご法要は正信偈（草四句目下）をお勤めします。ご着席の方はできるだけご一緒にご唱和下さい。（善仁寺同朋会にて唱和の練習会を年に数回程度開催しています。）

全体として、通夜の意義を考えればあまり華美になりすぎず、ひとつひとつ丁寧に執り行い、ご遺族の皆様で心を込めて故人を憶念する場であることが願われます。



一般的な白木祭壇を使用した飾り付けの例

Topics
善仁寺からのお知らせ

帰敬式受式者募集のご案内

帰敬式とは仏弟子の名告りとして、生前にご法名をいただく儀式です。来年執行予定の帰敬式の受式をご希望の方は善仁寺までご連絡下さい。

- 帰敬式日程
  平成28年2～3月頃（予定）
- 費用
  金　五万円／お一人
  （記念品・お食事代も含まれます）

※受式の際は付き添いも可能ですが、お食事費用は別途5千円／お一人必要となります。

- 申込受付期間
  平成二十七年九月日～
  十月末日
- 申込方法
  受式ご希望の方は善仁寺へお電話下さい。申込用紙をお送りいたしますので必要事項をご記入の上、ご返送いただきます。

※代理受式はできません。必ずご本人がご参列いただきます。

「帰敬式を終えて」

法名　釋演量
俗名　榊原 演

私は本年二月十二日、我が菩提寺の善仁寺本堂に於いて、平成二十六年度帰敬式を受け、右記の法名をいただきました。

私は今まで法名は逝去した際 即ち葬儀を行う時点でいただくものと思っておりました。

ところが色々お話しを伺うと、帰敬式は仏弟子になることであり、何とはない不安を虚無の中で毎日を無為に過ごしている私にとっては、今なるべく早く受式し、南無阿弥陀仏の教えに導かれて、人生の新たな出発にしようと考え、生前の今、受式したわけであります。

帰敬式は私一人の受式でしたが、三帰依文、剃刀の儀、法名伝達など順次、威儀を正しく遂行され、緊張の連続でした。

式後、客殿にて青山御住職に「お斎の席」を設けていただき、付き添いの妻ともども、感激的で心豊かなひとときを過ごさせていただきました。これで心おきなく現世を全うしたあかつきには、次に続く家族の者を待つ覚悟ができた感がいたします。

勿論、善仁寺の「墓友」諸兄のお力をいただきながらです。

南無阿弥陀仏。

（右写真→）

ミャンマーの仏塔（ミンゴォン・パヤー）の前で托鉢をする少年僧たち

世界最大の仏塔となるはずであったが、ボードパヤー王の死によって未完に終わった。
仏弟子になるとは、どのような意味があるのか、仏の願を人生をあげて、いただきつづけていく身となったことを考える契機となることが願われる。